

■西洋音楽の記譜研究——書かれたものと響くもの

●研究の目的（背景、範囲）

「記譜法（ノーテーション）」は、芸術資源研究センター設立の準備段階から、美術と音楽、伝統音楽の3つの領域をまたぐ共通のテーマとして設定されてきた。異なる分野の人間が共同で行なう研究のなかから、新しい発想や研究の視点を得ることを企図している。そうしたなかで、このプロジェクトは西洋音楽を中心とした記譜への新しいアプローチを行なうことを考えている。とくに、音楽上の記譜にかんして、書かれたものと、実際の音との間の関係性を研究しようとするものである。

以下の二つのテーマを設定して研究を行なう。

1) 西洋の古楽における多様な記譜のなかから、音楽の構成の論理を読み解いていく。

とくにバロック時代の記譜においては、書かれた音と実際に演奏される音との間にずれがあった。記譜されたものと記譜されないもの、あるいは習慣として伝えられるものとの関係性に着目し、記譜のメカニズムを解明する。

2) 現代音楽（西洋と日本）における記譜のなかから、とくに図形楽譜をとりあげ、音楽のあり方の何に变化が起きたのかを解明する。とくにジョン・ケージなどのアメリカの実験作曲家たちの不確定性の音楽における図形をもとにした多様な記譜のあり方を研究し、実際に演奏を行なうことによって、記譜のメカニズムと結果としての音のあらわれとの相関関係を解明する。

●研究の計画、方法

プロジェクトのメンバーによる研究会を毎月行ない、記譜にかんする諸問題について学び、議論を行なう。各自がそれぞれの研究を持ち寄って、経過報告をし、意見交換を行なう。高野はバロック音楽を中心とした古楽やバロック・ダンスの舞踊譜について、竹内は現代日本の作曲家の記譜法や採譜のあり方について、また柿沼は現代アメリカの図形楽譜を中心に発表を行なう。

●成果報告の方法、意義

研究会での成果を研究発表（講演）および演奏会の形で報告する予定である。初年度は準備段階としてもっぱら研究発表を活動の主体とする。そして次年度に、バロック・ダンスの舞踊譜と音楽との関係について、研究発表と演奏を組み合わせた演奏会を行なう予定である。また3年目には現代音楽と記譜にかんする何らかのプロジェクトを行なう予定である。ダンスと音楽による成果発表に美術学部からの参加の可能性を探り、多角的なプロジェクトとなることを期待している。こうした試みをとおして、分野を越えた横断的な研究が展開される意義は大きいと思われる。